

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会（第2回）の概要

- 1 日 時：平成24年9月26日（水）13：00～15：45
 - 2 場 所：北海道第2水産ビル 3階 3G会議室
 - 3 出席者：別添出席者名簿のとおり
 - 4 挨拶：道農政部生産技術担当局長より挨拶
 - 5 議 題
- 生食・加工用検討会（13：00～14：30）
 - （1）これまでの議論について
農産振興課より資料1、2、3を説明
 - （2）ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に関する課題について
農産振興課より資料4を説明
 - （3）ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に向けて必要とされる対策について
 - （4）意見交換
別添のとおり

 - でん粉用検討会（14：45～15：45）
 - （1）これまでの議論について
農産振興課より資料1、2、3を説明
 - （2）ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に関する課題について
農産振興課より資料4を説明
 - （3）ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に向けて必要とされる対策について
 - （4）意見交換
別添のとおり

出席者名簿

<生産者団体>

氏名	所属・役職等	生食加工	でん粉
鈴木 昭寿	北海道農業協同組合中央会 畑作農業課 主幹	○	○
藤井 正樹	ホクレン農業協同組合連合会 種苗課 課長	○	○
山本 開造	ホクレン農業協同組合連合会 でん粉課 課長		○
上田 裕之	十勝農業協同組合連合会 農産課 課長	○	○
藤谷 哲雄	上川生産農業協同組合連合会 農産課 課長	○	○
仲野 貴之	士幌町農業協同組合 農産部農産課 課長	○	○
須藤 昌彦	芽室町農業協同組合 農畜産部 次長	○	○
大西 貢	ようてい農業協同組合 営農推進課 課長	○	○
小野 丈夫	斜里町農業協同組合 営農部 部長	○	○
上野 隆	小清水町農業協同組合 営農部 部長	○	○

<試験研究機関>

田宮 誠司	独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター 畑作研究領域 上席研究員	○	○
江部 成彦	地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 北見農業試験場 主査 (馬鈴しょ)	○	○
北 智幸	ホクレン農業協同組合連合会 農業総合研究所 作物生産研究室 次長	○	○

<関連団体・企業>

田島 和幸	独立行政法人種苗管理センター北海道中央農場 農場長	○	○
井上 善幸	財団法人 日本特産農作物種苗協会 十勝特産種苗センター 農場長	○	○
福田 智史	一般社団法人 北海道消費者協会 商品テストグループ技師	○	
野口 英靖	(株)ラルズ営業本部商品統括部第1商品部 (青果) ※北海道スーパーマーケット協会 虎谷利一事務局長の代理 出席	○	
松井 正広	生活協同組合コープさっぽろ 商品本部農産部 バイヤー	○	
植村 弘之	日本スナック・シリアルフーズ協会 カルビーポテト株式会社 馬鈴薯研究所 所長	○	
久郷 真司	サンマルコ食品株式会社 商品部 次長	○	
小山 雅裕	社団法人 北海道馬鈴しょ生産安定基金協会 事務局長		○

<行政>

花岡 正博	北海道農政部 生産技術担当局長	○	○
今井 聡裕	北海道農政部食の安全推進局農産振興課 課長	○	○
内藤 晋介	北海道農政部食の安全推進局農産振興課 主幹 (畑作企画)	○	○
千崎 利彦	北海道農政部食の安全推進局技術普及課 主幹 (研究連携)	○	○

<オブザーバー>

富樫 英二	農林水産省北海道農政事務所 農政推進課 事業第2係長 ※土橋勝農政推進課課長補佐の代理出席	○	○
-------	--	---	---

(注) 生食加工：生食・加工用検討会、でん粉：でん粉用検討会

(第2回) 北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会 (生食・加工用) の意見概要

1 日 時：平成24年9月26日(水) 13:00~14:30

2 場 所：北海道第2水産ビル 3階 3G会議室

3 意見交換 (主な発言内容)

○ 関係団体

- ・ 資料2 (ジャガイモシストセンチュウ「抵抗性」とは) について、専門的で少しわかりにくい所もあるが、まとまっていて抵抗性品種とは何か伝わる。「過敏反応」は一般の方にはわかりづらいとは思ふ。
- ・ 抵抗性品種の普及は、男爵薯、メイクインの代わりにするのか、別に普及するのか。
- ・ 普及するときは何種類かに絞られるのか、又は、全種一定の比率で広げていくのか。

○ 北海道

- ・ 抵抗性品種にもたくさんの品種があるので、消費者や実需者にPRするときはある程度の品種に絞る可能性はある。PRの時期によって確保できる品種も異なってくる。

○ 流通団体・企業

- ・ 販売サイドから見ると、今後、PRが一番必要になってくると思う。
- ・ 馴染みの部分では、男爵薯、メイクインなので、抵抗性品種の普及を進めるには、特性や味などを伝えることが大事。

○ 加工団体・企業

- ・ 既存のブランド品種と抵抗性品種のバランスを取って頂ければ、私どもとしてはありがたい話。
- ・ ジャガイモシストセンチュウ発生在所だけでも抵抗性品種に切り替えたいということだと思うが、その部分だけPRして上手く行くのかと思う。
- ・ 男爵薯に代わる品種を確立してもらい、それが増えれば良いと思うが、それには時間がかかり、仮に抵抗性品種が増えていけば私どものような特定の品種をうたって製品を作っている所は困ることになるし、生食用の規格外などをどのように処理していくのかが、気にかかる。

○ 生産者団体

- ・ 普及目標については、生産者が抵抗性品種を拡大するだけでは片手落ちであり、生産対策だけでなく、消費拡大対策や研究開発体制の強化など同時並行で実施することが重要。
- ・ 更に、札幌段階の取組だけでなく、地域での普及拡大の取組や、流通・加工企業なども含む関係者が一体的に取り組む必要があると考えるので、関係者が連携して取り組むことを望む。
- ・ 生産者団体としても、馬鈴しょ全体の消費拡大を目的とした取組を、著名なジャーナリストにも参画してもらって平成24年8月31日から実施している。今回の抵抗性品種拡大の取組とも、今後、可能な範囲で協力していければと考えている。

○ 生産者団体

- ・ 抵抗性品種の中にも既存の男爵薯やメイクインと同等、または、上回るものもあると思う。

- ・ 産地として、男爵薯やメイクインの知名度の高さから、なかなか他品種の拡大につながらない。産地が協力して抵抗性品種を作っていくことが重要。
 - ・ 産地自らが抵抗性品種を導入していないとのイメージを持っている。
 - ・ 全体の合意の上で、抵抗性品種を普及していかないと難しいと思う。
 - ・ 加工用の抵抗性品種は、加工適性研究会などで新しい品種の検討をやっている。生食用の抵抗性品種の普及は産地側に責任があると思う。
- 生産者団体
- ・ 管内の抵抗性品種の導入は25%程度。
 - ・ 抵抗性品種の導入を進めてきたが、今は、男爵薯の需要に対応できていない状況にある。男爵薯の面積を維持していかないとならない状態。
 - ・ 抵抗性品種でも生産性の高い品種があり、生産者からは作りたいとの声が多くなってきているが、実需からは男爵薯が求められている。
 - ・ 抵抗性品種の需要がない中で、産地として対応していけないので、消費拡大対策や生産対策などを同時並行的に進めて行かなければならない。
- 流通団体・企業
- ・ たくさんの抵抗性品種があるのに切り替わってないのは、PR不足である。
 - ・ 大手スーパーのバイヤーに新品种のことを聞いてみたが、知らないという答えが多い。
 - ・ 流通団体・企業では、各種勉強会を開催しているので、道などが出向いて積極的にPRすれば良いと思うし、我々も協力する。
 - ・ 生産者団体としては、既存の品種の産地を抱えている中で、大手を振って普及拡大に取り組むと推察されるので、当面、道が旗を振って進める事が大事。
 - ・ 生産者と話をしたが、抵抗性品種をジャガイモシストセンチュウに汚染されていないほ場で作ってみたが、満足する単収が取れないので作付けの拡大は見合わせているとの意見であったが、品質・味が良い品種もあるので動向を見ていきたい。

(第2回) 北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会 (でん粉用) の意見概要

1 日 時：平成24年9月26日(水) 14:45～15:45

2 場 所：北海道第2水産ビル 3階 3G会議室

3 意見交換 (主な発言内容)

○ 試験研究機関

- ・ でん粉原料用品種について、品種開発の大きな柱として取り進めている。
- ・ 既存のでん粉用の抵抗性品種は、収量性や、枯凋期が遅いことでコナフブキに置き換えるメリットが少なかったため、これを改善することを最優先に品種改良を進めている。
- ・ H21年に育成した抵抗性品種のコナユキは、抵抗性品種の中で初めて中晩生、紅丸並みの品質であるが、収量の不安定性や小玉であることから翌年の野良生えなどの課題がある。
- ・ コナユキについては産地と協力しながら栽培法の改善試験を実施しているとともに、これらの課題を解消出来るような品種の開発に取り組んでいる。
- ・ 後続の北育20号は、でん粉品質については、紅丸とコナフブキの中間で、枯凋期はコナフブキより少し遅い晩生で、収量性はコナフブキより多収を目指している。今年から現地試験、26年1月に優良品種を目指す。コナユキより一回り大きく、品質は少し後退したが、それ以外は改善されている。

○ 試験研究機関

- ・ H03151-2は、恵庭ほ場の結果のみだが、枯凋期はコナフブキ並み、でん粉収量はコナフブキの10～30%多収、品質は紅丸に近い、疫病に強い、早掘り収量はコナフブキを上回る試験結果となっている。9月1日での早掘りの結果では、でん粉収量は850kgとなっており、コナフブキは700kgであった。(出来が悪い)ストロンからいもが離れやすい。疫病には強いが、ナツエキ(夏疫病)にはかなり弱そうなので、防除が必要。H25年度に現地試験を行い、試験結果を見て有望度が高ければ、地域在来品種への申請を考えている。

○ 試験研究機関

- ・ 多収量のでん粉原料用抵抗性品種として北海105号を育成中であるが、コナフブキより多収。来年より現地試験を行う。
- ・ 遺伝資源については、現在は北農研に関連研究室がある。海外から遺伝資源を導入している。

○ 生産者団体

- ・ 今年2月に北海道農協畑作・青果対策本部委員会で、「馬鈴しょでん粉の安定供給体制確立に向け たプロジェクト」を設置した。
- ・ 近年の馬鈴しょの作付面積の減少や天候不順を受け、でん粉生産量が激減しており、供給ができていない状況を打開するために設置。
- ・ 構成員は、でん粉主産地であるオホーツク管内から3名、十勝管内から3名、中央会、ホクレンとなっている。
- ・ 5～8月にかけて4回検討してきた。課題としては、①ジャガイモシストセンチュ

ウ蔓延防止対策、②種子馬鈴しょの安定確保、③新たな栽培技術体系の確立、④労働支援体制の構築などであるが、どの課題にも共通しているのが、⑤優良品種の開発・普及であり、これらに絞って協議をしている。

- ・ ジャガイモシストセンチュウ蔓延防止対策については、行政による指導力のある蔓延防止対策の徹底をお願いする。行政の指導がないと統一した取組の実現は難しい。各地域ごとでは、蔓延防止対策は限界で、地域の実情に沿った指導、行政による土壌分析機器の導入、防除施設の設置・維持などをお願いする。
- ・ 蔓延防止対策としてもっとも効果的なのは、抵抗性品種への切り替えで、プロジェクトの中では、でん粉原料用品種を 10 年後の平成 34 年度に 100%を目指す。
- ・ 抵抗性品種への切り替えに当たり、一般生産者・種子生産者に対する抵抗性品種への切替意欲の湧く助成を国・道に求めたい。
- ・ 種馬鈴しょの確保について、ほ場の条件付き再利用という意見もあるが、まずは、ジャガイモシストセンチュウの蔓延防止の徹底が必要。
- ・ 技術体系として、最近の気候に対応する栽培技術の確立が必要。
- ・ ジャガイモシストセンチュウ孵化促進物質の研究開発の促進が必要。
- ・ 労働支援体制の構築については、作業受託組織の育成、高性能ハーベスタの導入が必要。
- ・ 品種の開発については、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性が必須であり、でん粉収量性が高く、早堀でコナフブキ以上のでん粉収量、疫病等の抵抗性のあるものが必要。
- ・ 品種開発の早期化、現地での栽培技術の早期定着などの意見もあった。

○ 生産者団体

- ・ でん粉用の抵抗性品種を 100%にするのは賛成で、収量があれば切り替えは簡単に行くと思う。
- ・ 品種開発では、品質は紅丸並みで収量性はコナフブキ並みというのは、一つの命題であったが、今となっては、でん粉品質より収量性が重要。
- ・ 北海 105 号は離水率は良いがリン分高いということだが、早く品種化してほしい。

○ 生産者団体

- ・ 当検討会の位置付けはどのようなものか。また、今回取りまとめる提言の位置づけはどのようなものになるのか。
- ・ 行政の指導力に対する期待が高い。本検討会で取りまとめる対策を実行性があるものとする必要がある。

○ 北海道

- ・ 当検討会については、設置要領で示しているが、道も含めた関係者全体で、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大等について検討するため設置した。抵抗性品種の普及拡大に向けて策定する対策については、本検討会の名義で策定したいと考えている。
- ・ 本検討会で、将来の抵抗性品種への普及目標がオーソライズされれば、道としても、一つの目標として取り組んで行くことになる。

○ 生産者団体

- ・ 現場としての心配は、ジャガイモシストセンチュウの密度が高い地域で、密度を下げていくための抵抗性品種の導入スピードと、抵抗性品種の増殖スピードがマッチするのか心配。
- ・ ジャガイモシストセンチュウ対策に地域ごとに差があることは良くないので、道の指導が効果的であり要望する。

○ 北海道

- ・ ジャガイモシストセンチュウ対策全体については、道で「北海道ジャガイモシストセンチュウ防除対策基本方針」を定めているが、抵抗性品種の普及拡大に向けて、本検討会での検討結果を踏まえ改正なども検討したい。
- ・ 全道では4万h aでジャガイモシストセンチュウ土壌検診が行われているが、ジャガイモシストセンチュウが発生している地域での実施が少ない傾向。

○ 関係機関

- ・ 新品種の増殖については、各試験研究機関と連携を図り、一日も早く出せるように対応していきたい。